

2025 年度 人類文化研究コース 学生派遣事業 研究成果レポート

山本 恭正

1. 事業実施の目的

2025 年 9 月 20 日から 9 月 21 日にかけて、東京大学・駒場キャンパスにおいて行われる空間・景観研究会 2025 年度第 1 回年度大会に研究発表の発表者として参加すること。

2. 実施場所

東京大学・駒場キャンパス

3. 実施期日

2025 年 9 月 19 日（金）～ 2025 年 9 月 21 日（日）

4. 成果報告

●事業の概要

空間・景観研究会は、今年から年度ごとの研究大会が始まった研究会であり、東京大学現代人類学研究会、東京都立大学社会人類学研究会共催で開催された。専門分野や立場に関わらず、空間と景観に興味・関心を持つ幅広い層の研究活動を行っている人が集まることを期待して開催されたが、主に文化人類学や社会学を専門とする研究者や大学院生を中心に構成されていた。研究会の開催に伴い、同志社女子大学の太西秀之教授から「統合の場としての景観：生活世界の理解にむけて」と題した基調講演があり、司会を東京都立大学の河合洋尚准教授が務めた。

基調講演では、景観研究にはいくつかのアプローチがあるとされ、「自然科学系における景観研究」、「人文社会系の景観研究」、「考古学における景観研究」などが紹介された。その後、太西教授の専門である景観研究における文化／社会人類学の理論が示された。文化／社会人類学の景観に関する理論では、ティム・インゴルドの影響を強く受けて成立していること。そのインゴルドは、内的世界と外的世界との区別を拒否し、ランドスケープのなかで生活することによって、私たちがその一部分になるとともにランドスケープは私たちの一部分になるという彼の景観に対する考え方が示された。特に、インゴルドが提唱する「タスクスケープ」とアルジュン・アパデュライの「想像界」という概念（理論的枠組み）については、重要であるとして具体的な説明がなされた。

基調講演後は、セッションごとに空間と景観に関連する研究発表が質疑高騰を含めて 20 分間と 50 分間の形式で、実施された。研究発表のテーマは、信仰や聖地に関わるものや森林に関するもの、食文化や観光、エスニックイメージに関するものなどがあった。特に、新潟県立大学の古川勇気准教授の発表「環境と人びとの『記憶の身体化』ーペルー北部の民話

の宿る景観から」で、インゴルドの「話す」ことで身体と環境が呼応するという指摘も基づき、民話を話すことが実際の景観実践、特に開発や銅鉾山の閉鎖のための活動につながっているという話が印象に残った。また、総合研究大学院大学の OG で、吉林大学・講師の辺清音さんも「延辺州農村地域における外的観光景観とその脱領域化」と題した、主に朝鮮民族の文化表象に関連したテーマの発表をされていた。

最後に、建築家・原広司の「ディスクリート (discrete)」概念と多民族共存空間を接合させる研究と景観人類学という分野の系譜と新しい視点や理論についての紹介があった。特に、河合教授の景観人類学で、主にアメリカとイギリスで出版され、影響力をもった書籍とこれから持つと思われる書籍の説明が、分かりやすく勉強になった。なかでも、2017 年にイギリスで出版された“*Heritage Landscape* ”という書籍が自分の研究と照らし合わせて、非常に興味深く、購入したいと思った。

●学会発表について

発表タイトルは「『祈りの道』は、なぜ走ることができないのか——熊野参詣道伊勢路におけるトレイルランニングイベントの開催をめぐる」で、主に文化遺産とトレイルランニングをテーマとして発表した。本発表における「祈りの道」とは熊野参詣道伊勢路のことで、熊野地方において世界遺産の道と世界遺産ではない道が重層的に生み出されている状況を説明した。その後、発表の目的がなぜ世界遺産の道では、トレイルランニングイベントを開催したり、走ったりすることができないかを明らかにすることと述べた。そのうえで、国の文化財（史跡）である熊野参詣道伊勢路に見出せる幅広い種類の価値の体系について考察し、文化財保護行政が主導する文化遺産マネジメントの課題と可能性を明らかにしたいとした。

先行研究では、文化遺産がグローバリゼーションとナショナリズムとローカリズムがせめぎ合う場であり、常に文化遺産概念をめぐる議論にさらされ、揺らいでいると指摘した。また、文化遺産学と類似したテーマを扱う博物館学の分野では、文化や立場の違いを超えた対話と交流の場としての「フォーラム」という概念があり、博物館を社会的意義のある制度にするために、貴重な資料を来館者が崇めに来る「寺院」としての機能だけでなく、来館者への議論を呼びかけるフォーラムの機能の重要性が指摘されている。こうしたフォーラムの機能を文化遺産においても、博物館と同様に持たせることが重要であると主張した。

結論では、日本では、これまで、歴史的、学術的、鑑賞的価値等こそが文化財の本質的な価値だと長期にわたって考えられてきたこと。また、文化遺産は保護しなければならないという文化遺産の「グローバルな価値のヒエラルキー」に伴って生じる前提によって、地域社会が文化財のどの価値を、どのように追求したいかについて、積極的な対話や議論を試みる場としてのフォーラムの機能を持つことができない点を指摘した。この点が、地域社会における文化遺産実践を妨げる最大の障壁であると主張した。

質問では、熊野地方における景観の競合についてのコメントがあり、世界遺産による「文化の評価」によって生じた信仰上のイメージを伴う外的景観が、地域性を伴う内的景観を覆

い隠すほどの現象が実際に生じているか。具体的なエピソードや説明を求められた。回答として、熊野地方における中世と近世の信仰の歴史に関するテーマの書籍や雑誌、エッセイや論文等は数多く出版されているが、近代以降の信仰の歴史や近現代史を扱った書籍は圧倒的に数が少ないことや熊野に対するイメージは、つまるところ、熊野信仰や寺社の歴史的な展開において確立した様々な要素のコラージュであり、それは「精神性」を消費するツーリストの憧れと欲望によって生み出されており、最終的には癒し・蘇りという文脈に収斂されていく。拡散した熊野イメージは、世界遺産の持つ「人類共通の遺産」といった枠組みの拡大解釈による本質主義化や、飛躍した「文化的景観」概念によってイメージの景観への埋め込みを正当化する土台となっていることなどを指摘している研究者がいることを紹介した。

●本事業の実施によって得られた成果

・空間や景観に関連した研究している研究者たちから質問やコメントをしていただき、発表後に意見交換・情報交換などを行い、名刺交換を伴う交流を通して、親睦を深めることができた。

・自分の興味関心に近い研究者の発表を聞くことによって、今後の博士論文の仕上げにあたっての理論的な枠組みや方向性について、自分なりの確信を持つことができた。

●本事業について

以前のレポートでも記述したが、文化人類学を専攻する大学院生にとって現地における調査研究や国内外の学会発表などの研究活動は非常に重要であり、報告者は年に一度の割合で学生派遣事業の支援を受けてフィールド調査や研究発表を実施することができた。この事業は非常に有益な事業であり、今度も継続して欲しい。